『比較日本文化学研究』第 11 号（2018）

論　文

『大鏡』の世界

――「語り」の方法をめぐって――

李　　莘梓

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

The world of *The Great Mirror*: Yotsugi's narration

LI Shenzi

Abstract: *Ōkagami* aka *The Great Mirror*（大鏡）is a Japanese historical tale written in the 12th century by an unknown author, who recorded a narration made by Ōyake no Yotsugi before a Buddhist memorial service in Unrin'in Temple. Previous studies have demonstrated that Unrin'in Temple is where the Fujiwara family show their honor and propitiate their enemies' departed souls. This study shows that the Unrin'in Temple narration predicts the future of the Fujiwara family. Compared with other *monogatari* (i.e., "mirrors"), this book has extra narrators to allow the readers to explore aspects of the story from different perspectives. Finally, by analyzing the story of Goichijo emperor, this study shows that *monogatari* can be considered as a kind of literature with the features of historical records and tales.

Key words: The Great Mirror, Yotsugi's narration, Unrin'in Temple, mirrors, the story of Goichijo emperor

1. はじめに

『大鏡』には文徳天皇の嘉祥三年（850 年）から後一条天皇の万寿二年（1025 年）までの一七六年間の話が記述されている。巻一に、仁明天皇から後一条天皇までの各天皇の伝記が記載される。この部分は紀伝体の帝王本紀に当たる。巻二から巻五までは藤原冬嗣から藤原道長までの各代藤原家の権力者の伝記である。この部分は紀伝体の大臣列伝に当たる。巻五最後の藤原氏の物語には、藤原家遠祖の鎌足から道長までの藤原家系譜の略記が記載されている。この部分は紀伝体の表に当る。巻六には、藤原家と関わりの薄い昔話が記載されている。この部分は紀伝体の志に当たる。

『大鏡』の序文では、著者は大宅世継の言葉を通して、『大鏡』の主旨を次のように語る。

本文引用（1）[1]

「まめやかに世継が申さむと思ふ事は、こと事かは。只今の入道殿下の御有様の、世に傑れておはします事を道俗男女のお前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、あまたの帝王・后、又、大臣・公卿の御上を続くべきなり。その中に、幸ひ人におはしますこの御有様申さむと思ふ程に、世の中の事の隠れなく顕るべきなり。つてに承れば、法華経一部を説き奉らむとてこそ、先づ余教をば説き給ひけれ。それを名付けて『五時教』とは言ふにこそあなれ。しかの如くに、入道殿の御栄えを申さむと思ふ程に、余教の説かるると言ひつべし」など言ふも、わざわざしく事々しく聞こゆれど、いでや、さりとも何ばかりの事をかと思ふに、いみじうこそ言ひ続け侍りしか。

従来の天皇を中心として展開した六国史とは違い、『大鏡』は藤原家の栄華譚、その栄華の頂点に立つ人物である藤原道長に焦点を当てた。帝后・他の大臣のことが記述されたのは、それらの人々の事蹟が道長との関連が認められるためである。これは『法華経』を説くために、余教を先に説くことと等しい。

この段落において、著者の歴史叙述意図が明らかになった。世継が語ろうとするのは藤原道長を中心とする話である。他の人々に触れたのは道長の事蹟と関わりがあるか、道長までの藤原北家の系譜と関わりがあるからである。故に、語りの重点は他でもなく、道長である。

2. 語りの場の意味

『大鏡』の舞台は万寿二年五月の雲林院の菩提講である。河北騰氏は『大鏡全注釈』[2]で、「この年（万寿二年）の五、六月迄が、藤原道長の幸運と栄華の最終ともいうべき年」であり、同年七月に娘寛子、八月に娘嬉子が亡くなり、翌年息子の顕信が死に、娘彰子は出家し、また、万寿四年には娘妍子が死に、同年十二月道長自身が往生するといったように、大不幸と大悲嘆が踵を接して襲って来ることを指摘した。しかし、河北氏の論説に語りの場を雲林院の菩提講に設定した理由は説明されていない。『栄花物語』「嶺の月」によると、同じ万寿二年三月三十日に皇后宮の藤原娍子が亡くなった時、葬儀と七七日

の仏事は雲林院で行われた。七七日の法要はちょうど万寿二年の五月に当たる。つまり、『大鏡』の語りの場としての雲林院の菩提講の原型が娍子の七七日の法要であることは確かである。

藤原娍子は藤原済時の娘で、三条天皇の皇后である。三条天皇との間に四男二女を儲けた。その中の一人は藤原道長の圧力により、皇太子を辞退し、見返りに準太上天皇の待遇を得た小一条院である。つまり、藤原道長の栄華譚が語られるのは、その政敵である娍子の法会である。何故この場で道長の栄華譚を語るのであろうか。

小峯和明氏は『院政期文学論』[3]において、語りの場としての雲林院の菩提講を次のように説明した。

> 『大鏡』における雲林院の菩提講はすでに検討したように、万寿二年（一〇二五）の三条院皇后娍子の七七日供養にかさなる。そのことの意義は、道長の栄花を語りうるぎりぎりの時点であること、さらに雲林院が葬送や殯の場であったこととも関連して、道長の権威に隠れた怨霊や怨念の魂を救済し浄化する作用をもつこと、世継らの語りの正当性を保証する聖なる場であったこと等々にもとめられる。

小峯氏は万寿二年の雲林院の菩提講で、道長の栄華譚が語られることにより、藤原家、強いて言えば、道長に纏まる怨霊を救済する作用を持つと論説したのである。しかし、雲林院が葬送や殯の場という機能を考慮すれば、道長の最盛期で、雲林院で栄華を語ることは藤原家の衰退を暗示するのではなかろうか。

道長は政敵の娍子の子である小一条院に圧力をかけ、孫の後一条天皇を即位させた。そこから、道長を中心とする摂関政治が始まったのである。その政敵を制圧するように、藤原摂関家もいずれ新たな権力者に制圧されるのではなかろうか。

『大鏡』では、多くの場合藤原道長の優れた事蹟が語られているが、『大鏡』巻五では、法成寺の造営について重木より道長に纏わる不穏な空気が読み取れる。

本文引用（2）

今一人の翁、「唯今は、この御堂の夫を頻りに召す事こそ、人は堪へ難げに申すめれ。それはさは聞き給はぬか」と言ふめれば、世継、「然々、その事ぞある。

二三日まぜに召すぞかし。されど、それ、参るに悪しからず。故は、極楽浄土のあらたに顕れ出で給ふべき為に召すなりと思ひ侍れば、いかで、力堪へば参りて仕うまつらむ。行末にこの御堂の草木となりにしがなとこそ思ひ侍れ。されば、物の心知りたらむ人は、望みても参るべきなり。されば、翁ら、又あらじ、一度欠かず奉り侍るなり。さて参りたれば悪しき事やはある。飯・酒繁く賜び、持ちて参る果物をさへ恵み賜び、常に仕うまつる者は衣裳をさへこそ宛て行はしめ給へ。されば、参る下人も、いみじう忙がしがりてぞ、進み集ふめる」と言へば、

この段において、重木は法成寺の造営に人夫を徴発することを非難するが、それに対して、世継は人夫を徴発したのは極楽浄土を作るためであり、また、飯や酒などで工事の人夫を接待したり、衣服を配ったりすることもあることから、人夫にとっても悪いことではないと反論した。

世継は法成寺造営を肯定的に説明し、道長の法成寺造営を評価したが、重木の言葉の通り、当時の法成寺造営の参加者に不満の声が募るのも確かである。道長の栄華の側面には、このような不満や批評が潜んでいるのである。

また、巻五では、一品宮禎子内親王について以下のような予言が為された。

本文引用（3）

又、「世継が思ふ事こそ侍れ。便なき事なれど、明日とも知らぬ身にて侍れば、ただ申してむ。この一品宮の御有様のゆかしく覚えさせ給ふにこそ、又、命惜しく侍れ。その故は、生まれおはしまさむとて、いと畏き夢想見給へしなり。さ覚え侍りし事は、故女院・この大宮など孕まれさせ給はむとて見えし、ただ同じさまなる夢に侍りしなり。それにて、よろづ推し測られさせ給ふ御有様なり。

皇太后宮にいかで啓せしめむと思ひ侍れど、その宮のほとりの人にえ会ひ侍らぬが口惜しさに、ここら集まり給へる中に、もし、おはしましやすらむと思う給へて、かつは、斯く申し侍るぞ。行末にも、『よく言ひけるものかな』と、思し合はする事も侍りなむ」と言ひし折こそ、「茲に在り」とて、差し出でまほしかりしか。

この部分で、世継は禎子内親王の将来を予言したのである。禎子内親王が生まれた時に、世継が見た夢は、亡き女院詮子と大宮彰子が生まれた時に見た夢と同じである、と。つまり、禎子内親王は詮子と彰子と同様、将来皇子を生むことができる。その生んだ皇子が天皇になり、禎子は皇太后になるこ

とを予言している。ここで、世継は禎子内親王の将来の栄華を予言したのである。藤原家の次世代の栄華の予言ではない。

巻五に示されたように、摂関政治の基盤は、大臣の娘を天皇に入内させ、生んだ皇子を次の天皇に立たせる。大臣は天皇の祖父に当たり、孫である天皇を補佐するのである。詮子は兼家の娘で、産んだ皇子は後の一条天皇である。彰子は道長の娘で、産んだ皇子らは後の後一条天皇と後朱雀天皇である。詮子と彰子によって、兼家と道長の摂関政治が成り立ったのである。

特に、二人は藤原道長の摂関政治に大きな役割を果たした。巻五では、詮子が懸命に一条天皇に説得したことで、道長の関白宣旨が実現され、その恩返しに、詮子の亡き後、道長はその遺骨を首にかけて運んだことが記載されている。また、彰子によって道長が天皇の祖父になり、実質的な摂政関白になった。

しかし、禎子内親王は道長の孫娘であるが、藤原家の娘ではない。つまり、禎子内親王が皇子を生んだとしても、道長の摂関政治、ないし、頼通、教通の摂関政治は果たすことができない。実際に、禎子内親王の子である後三条天皇により、摂関政治が崩壊し、新たな政治形式である院政が生まれたのである。『大鏡』の著作年代を考えると、著者は藤原家摂関政治の衰退と院政の発展を把握している。故に、禎子内親王の予言譚は、藤原家の栄華が道長に至って頂点になったが、その後、徐々に衰退していくことを予言したのではないだろうか。

『大鏡』は藤原家、特に道長の栄華を重点として展開されているが、その栄華の背後に潜む藤原家への反発や、藤原家の衰退の兆しも読み取れるのである。著者は藤原道長の政敵である娍子を弔う雲林院の菩提講を語りの場として設定することで、道長とその子孫の衰退、いわば、摂関家の衰退を暗示したと考えられる。

3. 語り手

(1) 語り手の立場

先述したように、『大鏡』は藤原家、特に道長の栄華を描こうとする。この主旨を説明するために、著者は語りの場を丁寧に設定した上、語り手の設定にも工夫を施した。『大鏡』の語り手は、190 歳の大宅世継と 180 歳の夏山重木である。二人の相槌役として、30 歳ぐらいの青侍も登場する。

序文では語り手の二人の身分が詳しく紹介される。世継は宇多天皇の母である班子女王の召使いで、重木は藤原忠平が蔵人の少将であったころの小舎人童の大犬丸である。重木は昔藤原家に仕えた人間である。彼の主人の藤原忠平に対する感情は次の一文に窺うことができる。

本文引用（4）

猶、わが宝の君に後れ奉りたりしやうに、物の悲しく思う給へらるる折こそ侍らね。八月十日余りの事に候ひしかば、折さへこそあはれに、『時しもあれ』と覚え侍りしものかな」とて、洟たびたびかみて、えも言ひ遣らず。いみじと思ひたる様、まことに、その折も斯くこそと見えたり。

「一日片時生きて世に巡らふべき心地もし侍らざりしかど、斯く迄候ふは、いよいよ拡ごり栄えおはしますを見奉り、悦び申させむとに侍んめり。

この段落を通じて、忠平が亡くなった時に重木は悲しんだこと、現在の忠平の子孫の栄華を見届けてすごく喜んでいることが分かる。かつて藤原家に仕えて、藤原家の今の栄華を見届けた重木は藤原家の栄華譚を語るにふさわしい人物である。

しかし、実際に『大鏡』の話はほとんど世継が語ったものである。世継はその身分から考えると、藤原家との関係性が薄いのである。加納重文氏は『歴史物語の思想』[4]「第Ⅱ編　大鏡」において、『大鏡』の語り手の世継を次のように論説した。

『大鏡』の語り手の老翁のうち、大宅世次が宇多天皇の母后女王の召使であって、夏山繁樹が貞信公藤原忠平の小舎人童であったという設定を思い出す。宇多天皇は藤原氏を外戚とせず、反藤原摂関政治の立場を取った帝王であるが、父帝の政治姿勢を穏健に継承した醍醐天皇と、藤原勢力の代表者忠平との間におこなわれた協調的な政治が、延喜の治と称されている。この時も、摂関がおかれなかった。こうしてみると、『大鏡』作者が、道長流の摂関独占政治に批判的な姿勢を持っているのは明らかと思われ、むしろ道長権勢を解剖して、敵の本性を探ろうとする態度まで感じてしまうのであるが、これは感じ過ぎであろうか。

加納氏は、『大鏡』の語り手の世継の身分の設定から、主君と同様に反藤原勢力の立場に立っていて、藤原氏に対しては批判的態度を持っており、彼が

藤原氏の栄華を語るのは敵の本性を探り出すためであると判断した。

しかし、『大鏡』を検討してみると、世継に反藤原勢力があるという姿勢は見られない。むしろ、世継は藤原忠平を仕えた重木と同様に親藤原勢力に属しているのである。その証拠に、先述した『大鏡』巻五の法成寺の造営の段[5]において、藤原家を擁護する立場の重木は法成寺の造営に人夫を徴発することを非難した。そこで、世継は人夫を徴発したのは極楽浄土を作るためである。また、飯や酒などで工事の人夫を接待したり、衣服を配ったりすることもあるため、人夫にとっても悪いことではないと反論した。この段から見ると、世継は加納氏が指摘した反藤原勢力に立っておらず、藤原家の家来である重木より藤原家を擁護する姿勢が見られる。

(2) 多数の語り手の設定

他の鏡物と比べると、『大鏡』の語りには独自性が見られる。それは、『大鏡』の語り手の設定である。

	『大鏡』	『今鏡』	『水鏡』	『増鏡』
語り手	大宅世継、夏山重木	あやめ	修行者（翁）	老婦
相　槌	青侍	なし	なし	なし
聞き手	法会に参加する人々	寺めぐりをする人々	老尼（翁）	清涼寺の法会に参加する人々の中の一人
記述者	法会に参加する人々の中の一人（藤原妍子や禎子内親王の縁者）	寺めぐりをする人々の中の一人	老尼	同上

四鏡のうち、語り手が複数に設定されたのは『大鏡』のみである。前五巻の主な語り手は世継であるが、重木や青侍が色々な事件に対して、意見や感慨を述べた部分も少なくない。その上、巻六では重木の発言が多くなる。彼は自分が関与する事件や身の回りの有名な人物の逸話を数多く語った。彼の話に混じって、彼の妻もたどたどしげに昔仕えた中務の「都には待つらむものを逢坂の関迄来ぬと告げや遣らまし」という和歌を語ったのである。

重木の妻が、重木と共に菩提講に参加していることはすでに序文で紹介した。世継と重木が自分の妻について語り合う場面も序文に見られる。

本文引用（5）

「そこにおはするは、その折の女人にや御出ますらむ」と言ふめれば、重木がいらへ、「いで、さも侍らず。それは、はや亡せ侍りにしかば、これはその後相添ひて侍る童なり。さて、閣下はいかが」と言ふめれば、世継がいらへ「それは、侍りし時のなり。今日もろともに参らむと出で立ち侍りつれど、わらは病みをして当たり日に侍りつれば、口惜しくえ参り侍らずなりぬる」とあはれに言ひ語らひて泣くめれど、涙落つとも見えず。

世継の妻は菩提講の日に瘧の発作が起きたために、その場にいないが、重木の後妻は重木と共に、菩提講に参加したことが紹介される。二人の妻はこれから語る内容との関係性が薄いにもかかわらず、著者が序文でわざわざ妻たちを紹介し、巻六で重木の妻に発言させ、世継を妻の代弁者として妻の昔の恋文などを紹介させたのは何故であろうか。

『大鏡全評釈』[6]は、次のように二人の妻の登場を解釈している。

世慣れた翁どものことばの応酬によって醸し出される笑いの効果は抜群である。それはまた、作者が意図した対応・配合の工夫のおもしろさともつながっている。十歳年下の重木が遥かに若い後妻を持ち、年長の世次がさらに十二歳年上の古女房を持っている。重木の妻は年下なのに記憶力が弱い。世次の古妻はそれほど年長者なのになお記憶力が旺盛である。さらに、重木の妻は田舎生まれで、容貌も大したことはないらしいが、世次の妻は都育ちらしく、しかもなかなかの美貌であったらしい。まことに、逞しい創作力が生んだ対比・配合の妙味である。

『大鏡全評釈』は、世継の妻と重木の妻の造形が、おかしさや面白みを狙った工夫と解釈したが、本論文では、巻六の構成、前後の話の関連から、二人の妻を登場させる理由を分析したい。

先述したように、巻一～巻五は紀伝体史書の本紀と列伝に当たるが、巻六は紀伝体の志に当たる。巻六は政治を中心とする前の五巻とは違い、語り手の二人の実体験をめぐって昔の風流の出来事が紹介された。巻六の話題と語り手は次の通りである。

語り手	世継	重木	世継	青侍
話題	a. 世継幼少期の事—光孝天皇の即位の事 b. 宇多天皇の時の天地異変の事 c. 朱雀天皇の事 d. 平将門討伐の臨時祭の事、紀貫之の和歌	e. 伊勢と宇多天皇の贈答歌 f. 醍醐天皇の事、鷹狩りの事 g. 源公忠は鷹・雉の味が食べ分けられる事 h. 醍醐天皇、宇多天皇の御幸とその都度に作られた和歌の事 i. 朱雀天皇の退位の事 j. 村上天皇の梅の事 k. 斎宮女御の七絃琴 l. 重木が都の外に出かけること—紀貫之の事 m. 重木の妻—中務の和歌の事	n. 世継の妻—良岑衆樹の和歌 o. 信雅・重信の村上天皇を偲ぶ事 p. 源氏の事—信雅・重信の事 q. 藤原実資の事 r. 寂照入宋の餞別法要 s. 清範律師の臨機応変の事 t. 法成寺の五大堂供養—世話役の臨機応変の事 u. 詮子四十歳の祝賀会—舞踏を教える先生に階位を授ける事 v. 彰子の大原野行啓 w. 一条天皇即位時の怪異 x. 観相の事 y. 白女の歌 z. 凡河内躬恒の歌 aa. 好忠推参の事件	ab. 三条天皇即位の大嘗会の女房の事

巻六の語り手は何度も変わる。冒頭に、青侍が世継の幼少期の事を聞くという形で、世継の語りが始まる。紀貫之の話題になると、昔貫之に仕えた重木が語り手となり、重木の妻の話をした後に世継も自分の妻の話をし、語り手は再び世継と変わる。青侍が不思議な事を語った後に、講師が現れることによって、語りは終わる。

前後の話の配列から、二人の妻の話により、語り手は重木から世継に変わったのである。言い換えれば、二人の妻の話は語り手を順調に交代させる役割を果たすのである。

また、同巻によれば、重木の妻は、陸奥国の安積の沼の出身である。中務に仕えて中務の主人が都に帰った時に、一緒に都に来たとある。また、中務が上京する際に、逢阪で作った歌「都には待つらむものを逢坂の関迄来ぬと告げや遣らまし」をたどたどしげに詠む。この話の辻褄から、重木の妻を設定するのは、中務の和歌を紹介するためである。それと同様、世継の妻を文徳天皇の后藤原明子に仕える高級女房に造形したのも、良岑衆樹と関係を持つことを虚構し、良岑衆樹の和歌を紹介するためである。

さらに、二人の妻のイメージが巻六になると鮮明になることは着目すべきである。前述したように、巻六の語り手は前五巻と同じであるが、語りの内容は前五巻の政治の話題から離れ、和歌や祭りなどの文化事情や、宮廷や貴人に仕える女房の視点からの語りが多くなる。そのため、二人の妻の設定は政治や漢文を代表とする男性の世界から仮名文学を代表とする女性の世界への架け橋の役割を果たしたと考えられる。序文での二人の妻の設定は、『大鏡』の語りの内容の転換の布石ではなかろうか。

総じていえば、『大鏡』の著者は可能な限り、たくさんの語り手を設けた。前五巻の主な語り手は世継で、巻六になると、重木が語る話が多くなり、重木の妻や青侍も身近な体験談を語るのである。多数の語り手を持つ巻六は、政治事件の他、和歌などの文化事情や、源氏の人々など様々な話題で組み立てられた。そこに、『大鏡』の著者が表したい世界観が明らかになった。権力者である藤原家、特に道長の栄華の世界がメインであるが、その補完としての文芸や逸話などの話も加えることで、当時の貴族世界の全貌を読者に示したのである。

4. 編年体から紀伝体へ

『大鏡』以前の六国史、『大鏡』に多大な影響を与えた『栄花物語』などの歴史書物はほとんど編年体の形を取ったが、『大鏡』は人物を中心として物語を展開した。いわば紀伝体で記述を展開したのである。

中国の唐代の劉知幾は『史通』において、『史記』を紀伝体の代表作品として、紀伝体史書を次のように評価した。

> 史記者、紀以包舉大端、傳以委曲細事、表以譜列年爵、志以總括遺漏、逮於天文地理國典朝章、顯隱必該、洪纖靡失。此其所以爲長也。若乃同爲一事、分在數篇、斷續相離、前後屢出、於高紀則云語在項傳、於項傳則云事具高紀。又編次同類、不求年月、後生而擢居首帙、先輩而抑歸末章、遂使漢之賈誼將楚屈原同列、魯之曹沫與燕荊軻並編。此其所以爲短也。[7]

劉知幾は『史記』のような紀伝体歴史書が本紀で皇帝などの政治事件を記録したり、列伝で臣下の細かいことまでも記録したり、表で大事件を時代順に並べたり、志で以上の三つの部分の記録漏れを補充したりすると述べた。

政治にかかわる大事件から些細なことまでも記録するが、同一の事件をすべての参与者の伝記に記録することもある。その上、同じジャンルの人は時代の前後を問わず、同じ伝記に記録したり、後の時代の人の伝記を先の時代の人の伝記の前に記録したりするという欠点がある。

この紀伝体史書に対する評価を踏まえ『大鏡』を分析すると、『大鏡』の著者は紀伝体の史書に倣い、『大鏡』の各巻を配置したが、内容面では、『大鏡』の独自の設定も見られる。

旧来の紀伝体の史書には、帝王本紀に政治事件を記録し、その事件に関わる細かい事情を参与者の大臣の列伝に記録するのが常套である。それに対し、『大鏡』の帝王本紀は簡略化が行われている印象がある。ここで、朱雀天皇の本紀を例として、分析を行いたい。

本文引用（6）

次の帝朱雀院天皇と申しき。これ、醍醐の帝の第十一皇子なり。御母、皇太后宮穩子と申しき。太政大臣基経のおとどの第四の御娘なり。この帝、延長元年癸未七月二十四日生まれさせ給ふ。同じ三年十月二十一日東宮に立たせ給ふ、御年三歳。同じ八年庚寅九月二十二日位に即かせ給ふ、御年八歳。承平七年正月四日、御元服、御年十五。世を保たせ給ふ事、十六年なり。

朱雀天皇本紀を分析すると、以下の出来事が記載されている。

①天皇の父母の情報。

②天皇即位の事情。その中に、東宮に立った時、元服した時、即位した時、治世の年数が記載されている。

総じていえば、朱雀天皇紀には天皇の誕生から退位までの略史が記載されている。

旧来の紀伝体史書の本紀の「包舉大端」、つまり大綱を述べる役割は『大鏡』には見られない。言い換えれば、『大鏡』においては、明確なタイムラインがない。『大鏡』の前五巻で各話を関連させるのはタイムラインではなく、藤原家の系譜である。『大鏡』の著者は物事の発生するタイムラインより、事件の参加者そのものを重視する傾向がある。

また、『大鏡』の列伝も旧来の紀伝体歴史書と比べると、その語りの重点が違う。旧来の紀伝体歴史書の列伝は、一人の生涯、あるいは、同じ特徴や職

業を持つ何人かの生涯が一つの列伝に記載されるのが普通である。語りの重点は無論、人々の生涯である。一方、藤原家の系譜を重視する『大鏡』には妻子などの情報が記載されている。ここで、巻五の藤原道長の記事を中心に、列伝の特徴を分析していく。

道長本人の出来事
①父母の情報
②任官歴
③天皇家との関わり
④関白に任じた経緯

妻倫子について
①父母の情報
②子女
　a. 彰子（立后などの事情）
　b. 妍子（禎子内親王について）
　c. 威子（結婚、妊娠などの事情）
　d. 頼通
　e. 教通
③倫子の栄華

妻明子について
①父母、養母の情報
②子女
　a. 寛子
　b. 尊子
　c. 頼宗
　d. 能信
　e. 長家
　f. 顕信（出家の詳細）

道長の和歌
①春日の行幸（彰子と和歌を交わした）
②倫子の六十歳の祝賀の和歌
③禎子内親王生誕の産養に作った和歌

道長の優れた事
①花山天皇の肝試し
②人相の事
③賀茂行幸の姿
④二条邸の弓射
⑤女院詮子石山詣（伊周とのトラブル）
⑥道長・伊周との摩擦
⑦関白宣旨（詮子の働き）

藤原氏物語（鎌足～道長）
藤原氏の氏神
藤原氏の氏寺（多武峰、山階寺）
皇后の父となった人々
諸寺院のこと（大安寺、浄妙寺、極楽寺、法性寺、法成寺）

法成寺諸堂参拝

『大鏡』の他の列伝の構成は道長伝と大体一致している。列伝の最初に語りの中心となる人物の生涯を簡単に紹介する。人物の生涯に、①父母の情報、②任官歴などがある。次に、③天皇家との関係や、④関白に任じた経緯を紹介し、摂関政治の成り立ちを説明した。

三番目に記載されているのは、妻子の情報である。①妻の父母、②子女等が紹介されている。男子は任官などの事情が記載され、女子は結婚や産んだ子供などが記載される。

四番目に記載されているのは、本人の文化面の事情である。参加した祭り、作った秀歌などはこの部分に記載されている。

最後に記載されているのは本人に関する出来事などである。道長の場合、

道長の優越性を証明するために、ほとんどの事蹟は伊周をはじめとする公卿と比較して記述されている。

	道長と比較する人	道長の優れた所
①花山天皇の肝試し	兄道隆、兄道兼	豪胆
②人相の事	兄道隆、兄道兼、甥伊周	人相が素晴らしい
③賀茂行幸の姿		見目がいい 公的な作法の正しさ
④二条邸の弓射	甥伊周	堂々とした姿
⑤女院詮子石山詣 （伊周とのトラブル）		
⑥三月巳日の祓に、道長・伊周との摩擦		
⑦関白宣旨（詮子の働き）		

記事①・②・④は兄道隆、兄道兼、甥伊周と比較することによって、道長の豪胆、凛々しげな姿を現している。記事⑤・⑥は甥伊周との衝突の記事である。二人の間の険悪な空気の中、道長やその家来の凛々しさが現れ、甥伊周より優れた道長の姿が見えてくる。

総じていえば、『大鏡』の著者が紀伝体の形で歴史を記述するのは、歴史を動かす重要な人物の事績を重視したためである。故に、人物を中心とする紀伝体の形を使い、記述したのである。それに、著者は無造作に紀伝体の形を使うのではない。著者は帝王本紀を簡略化し、語りの重点を列伝においたのである。また、列伝の各話の配置は、系譜、一族の流れを重んじる傾向が見られる。

5. 小一条院東宮辞退事件に対する『大鏡』の語り

『大鏡』は色々な語り手を通じて、それぞれの経験譚を紹介する。本節では、同じ「小一条院東宮辞退事件」に対する世継と青侍それぞれの視野から『大鏡』の語り手を複数に設定する意味を考えてみたい。

小一条院の東宮辞退は当時の一大事件である。三条天皇の死後、藤原道長の圧力により、敦明親王が自ら東宮を辞退する願いを出した。小一条院の尊号が贈られ、準太上天皇の処遇をもらい、道長の娘寛子を妃として迎えた。

一方、道長は計画通りに、孫である後一条天皇を即位させ、自ら摂政となったのである。この一連の出来事は『大鏡』の他、『栄花物語』、『御堂関白記』、『小右記』などの公卿の日記にも記載されている。

『大鏡』において、小一条院東宮辞退事件は左大臣師尹の伝記に記載されている。著者は世継の口を借りて、次のようにこの事件を紹介したのである。

本文引用（7）

但し、道理ある事と皆人思ひ申しし程に、二年ばかりありていかが思し召しけむ、宮達と申しし折、よろづに遊び慣らはせ給ひて、うるはしき御有様いと苦しく、「いかで斯からでもあらばや」と思しなられて皇后宮に、「斯くなむ思ひ侍る」と申させ給ふを、いかでかは「げにさも」とは思さんずる。「すべて、あさましく、あるまじき事」とのみ諫め申させ給ふに、思し余りて入道殿に御消息ありければ、参らせ給へるに、御物語細やかにて、「この位去りて、唯心易くてあらむとなむ思ひ侍る」と聞えさせ給ひければ、「更に更に承らじ。さは三条院の御末は絶えねと思し召し掟させ給ふか。いとあさましく悲しき御事なり。斯かる御心の付かせ給ふは他事ならじ。唯、冷泉院の御物の怪などの思はせ奉るなり。さ思し召すべきぞ」と啓し給ふに、「さらば、ただ本意ある出家にこそはあんなれ」と宣はするに「さまで思し召す事なれば、いかがはともかくも申さむ。内裏に奏し侍りてを」と申させ給ふ折にぞ、御気色いと良くならせ給ひにける。

さて、殿内裏に参り給ひて大宮にも申させ給ひければ、いかがは聞かせ給ひけむな。この度の東宮には式部卿の宮をとこそは思し召すべけれど、一条院の「はかばかしき御後見なければ、東宮に当代を立て奉るなり」と仰せられしかば、これも同じ事なりと思し定めて寛仁元年八月五日こそは、九つにて三宮東宮に立たせ給ひて、寛仁三年八月二十八日御年十一にて、御元服せさせ給ひしか。先づの東宮をば「小一条院」と申す。今の東宮の御有様、申す限りなし。終の事とは思ひながら、唯今かくとは思ひ掛けざりし事なりかし。

『大鏡』によれば、敦明親王は東宮生活が気づまりで、東宮を辞退する意志があった。この意志を母后の娍子に伝えたが、納得されなかった。そのため、道長に手紙を送って辞退の意思を伝えた。道長は最初は断ったが、敦明親王の懇願により最終的に認め、後の後一条天皇を新しい東宮に立て、敦明親王に「小一条院」の尊号を贈ったとある。

この記載は大体『栄花物語』のゆうしでの巻と一致している。異なるのは藤原道長が東宮辞退のことを知る経緯である。『栄花物語』はある人を介して道長と辞退のことを相談したと記載するが、『大鏡』は敦明親王が道長に手紙を送ったと記載する。

歴史物語の記述は多少史実と違いがあるが、この事件の参与者である道長の日記『御堂関白記』[8]の寛仁元年（1017年）八月の条に東宮辞退事件は次のように記載された。

四日、己巳、二位中將来云、東宮蔵人内記行任来云、宮被仰様、我此東宮何止之哉、以誰令聞、若參哉、我云、有召早參聞案内可来、依有召參入、返来示此由、又我可參者、

五日、庚午、深雨、雷有聲、虫悉死無愁云々、中將參彼宮、還来云、彼事一定了、今明間早可參給者、

六日、辛未、依蝗虫諸社奉幣、以能信従東宮有今日可来消息、仍詣彼宮、攝政・大將・左衛門督・二位中將相従、以雅康令啓參入由、即參御前、被命云、為申停春宮事聞消息、立寄事慶申者、余申須申承由、而能思定可被仰者也、皇后宮・左大臣被何申者、命給様、宮不快、左大臣任心者、日来間思定所聞也、早停此春宮号、可然相定可宣者、申云、攝政候、召彼同定申者、召攝政相定申、年官年爵如本、御封又如本、此外若有思食事者、只随仰、御氣色有可給受領之心、仍余申給受領給如何、其氣色甚能、仍聞可給々之由了、又随身事同被命、承此由等退出、參内、啓皇太后宮此由、其氣色非可云、候宿、

七日、壬申、早朝従内罷出、可然上達部多来、相定云、如此事日　可延、只今吉平可被問日、又申日非可忌者、召吉平問、申云、明後日吉日、彼日早可被行者也、雑事相定了、即參皇太后、啓案内、退出、

九日、甲戌、曉參内、女方同參、以三宮立皇太弟、宣命申時、（後略）

（廿一日。立春宮儀式の詳細）

廿五日、庚寅、従曉雨下、午後雨下（止）、一代一度仁王会事右大臣定之、右大將撿挍云々、前春宮号一條院、置判官代・主典代、充御封、〈本数、〉左右近衛各五人為随身宣旨下了、依御消息參彼院、

道長本人の記録によると、以下のような動きがあったことが分かる。

寛仁元年八月四日、敦明親王は藤原行任を通じて、藤原能信の参内を命じた。能信が道長と相談し、参内した。参内後、道長に敦明親王の東宮辞退の意思を伝えた。

八月五日、能信は再び東宮に参内し、道長の参内の事を伝えて、六日の道長の参内の許可をもらった。

八月六日、道長は頼通たちと一緒に参内し、東宮辞退のことについて、敦明親王と相談した。最終的に、東宮辞退を成し遂げ、辞退後の敦明親王の処遇問題も提起した。その後、皇太后の藤原彰子にこの事を伝えた。

八月七日、道長は公卿と東宮辞退のことを相談し、吉日である九日に、宣旨を下すことを決めた。

八月九日、後の後一条天皇に東宮の宣旨を下した。

八月二十一日、東宮を立てる儀式を行った。

八月二十五日、敦明親王に「小一条院」の尊号を送った。

『御堂関白記』と比較すると、世継はほぼ事実どおりに小一条院東宮辞退事件を語ったことがわかる。世継は事件を語った後、この事件に対して「この院の斯く思し立ちぬる事、かつは殿下の御報の速くおはしますに押され給へるなるべし」と評価した。つまり、世継は小一条院が東宮を辞退し、東宮の座を後の後一条天皇に譲ったのは、道長の果報がよく、藤原済時の系統を圧倒したからだと認識したのである。

それと対照的に、その続きの部分に、青侍は興味津々に東宮辞退事件の詳細を語ったのである。本文が長いため、ここで要点だけをまとめた。

① 敦明親王が東宮を辞退する原因	a. 生活面の不自由が出た。父帝の死後、東宮なりの処遇をされていない。 b. 道長は敦良親王を東宮に立てたいという噂による不安が出た。
② 敦明親王の思惑	a. 東宮の座を取られるより、自ら辞退したほうが有利である。 b. 寛子と結婚し、道長との縁組をしたい。 →東宮を辞退して、寛子と結婚したい。

③	道長に辞退を知らせる経緯	a.　母后に退位の意思を伝えたが、納得してもらえない。 b.　蔵人を遣わし、能信を参内させる。 c.　顕光の退出を待ち、ようやく参内できた能信に東宮は辞退の意思を伝えた。 d.　道長に伝えるため、母屋で待機する能信は伯父の俊賢に会い、辞退の事を伝えた。俊賢の助言により、手早く道長に報告した。
④	道長側の思惑	手早く退位させずに、延期したら、敦明親王は取りやめる恐れがある。
⑤	道長と敦明親王との対面	a.　道長の付き人の勢いと対照的な東宮の寂しさ。 b.　宮人は道長が寛子入内の件で東宮に参内すると勘違いした。 c.　東宮を見て不憫に思う道長は東宮辞退後の処遇を決めた。 d.　娍子と女御の失望。
⑥	寛子との結婚	小一条院は道長によって、優遇された。

①「敦明親王が東宮を辞退する原因」は史実どおりに記載されていると思われる。この二つの原因はすべて藤原道長の圧力によるものだと考えられる。

②「敦明親王の思惑」と④「道長側の思惑」にはそれぞれ敦明親王や藤原道長側の人間の策略が見られる。青侍にせよ、『大鏡』の著者にせよ、当時の敦明親王や道長の思惑を知ることはできないが、著者は対立した両側の人間の心理の動きを細かく設定したのである。敦明親王は、政治の形勢を正確に把握し、自分にとって一番有利な東宮辞退の策略を取り、道長側は手早く退位を促したのである。両側の心理や言動の設定は虚構だとしても、当時の状況から分析すると、敦明親王と道長との間の博奕がありうるかもしれない。『大鏡』の政治性がここでもうかがえるのである。

③「道長に辞退を知らせる経緯」は大体先行作品と一致している。ドラマチックな所はcとdの能信が東宮、道長との面会を待っている場面である。この二つの「待っている」場面は、読者に緊迫感を与えたと思う。先述したように、『大鏡』は主に道長の立場に立ち、語りを展開させる。この話に、道長にとって好都合の東宮辞退を早く成就したいのは望みであるが、二つの休止符を置くことで、能信の焦りを読者に伝え、その場にいるような臨場感や緊迫感がもたらされる。

⑤「道長と敦明親王との対面」、⑥「寛子との結婚」に、道長が政敵に勝っ

て、権力を持つようになると、政敵に対する情けが描かれている。敦明親王の場合、東宮辞退の後、かなり優遇されたことが記録されている。「小一条院」の尊号を与え、準太上天皇として待遇され、娘の寛子を入内させる一連の行動に、道長の懐柔政策が見られる。道長の政治の敏腕と柔軟性を褒めたたえた『大鏡』の主旨と一致している。

青侍の語りと『御堂関白記』を比較すると、参与者本人の日記に記載されていない人物の心理描写などを詳述し、生き生きとした人物が描かれ、読者に臨場感を与えたのである。

このように、世継が東宮辞退事件を語った後、青侍が同じ事件を語ることは興味深い。これについて、辻和良氏は「侍語り『小一条院東宮退位事件』をめぐって—『大鏡』「批判性」の主題論的理解—」[9]で、次のような結論を出した。

> 侍語りは、世継語りとは異なる視点から、しかし同じ方向を向いて事柄を描いたものである。それは世継語りでは語り切れていないことを新たに捉えているのである。侍語りを世継語りに重ねていくことによって、『大鏡』の語りは記事の信頼性を増し、道長像の厚みを獲得していると理解できるのである。

辻氏は侍語りと世継語りは同じ方法で事柄を描くことを指摘した。しかし、以上の分析から、世継語りは「史実に近い語り」で、侍語りは「物語化された語り」であることが分かる。著者は同じ事件に対し、二つの手法で描いたのである。この二つの語りの方法は、同時に歴史物語、強いて言えば、鏡物に存在するのである。「史実に近い語り」は信憑性を強調し、「物語化された語り」は鏡物が物語と歴史の二つの文体を融合させていることの証である。

6. おわりに

『大鏡』は鏡物の開山作である。『大鏡』において、歴史語りが新たな段階に入った。以前の編年体歴史物語や歴史書とは違い、『大鏡』ははじめて大臣を中心とする紀伝体で記述したのである。

また、『大鏡』は口述で歴史を記述した。『大鏡』以降の鏡物はすべて『大鏡』の形に倣い、物語の場、語り手、聞き手を設定し、歴史を口述の形で記述したのである。『大鏡』の語り手は藤原家を擁護する立場であるが、複数の

語り手によって、様々な視点で歴史を語らせることが可能となった。故に、貴族社会をいろいろな視点から描くことが可能となった。しかし、残念なことに、『大鏡』以降の鏡物は語り手を一人に限定することによって、歴史語りが簡略化されてしまった。

さらに、小一条院東宮辞退事件に、鏡物の「史実に近い語り」、「物語化された語り」という二つの語りの方法が見えてくる。このような語りを持っている鏡物は信憑性を示すと同時に、物語と歴史を融合させ、新たな文体を形成したといえる。

注

[1] 本稿での『大鏡』本文引用は河北騰著『大鏡全注釈』(明治書院、2008年)によるものである。底本は「東松本大鏡」である。

[2] 注1と同書。

[3] 小峯和明著『院政期文学論』(笠間書院、2006年)

[4] 加納重文著『歴史物語の思想』(京都女子大学、1992年)

[5] 本文引用 (2)。

[6] 保坂弘司著『大鏡全評釈』(学燈社、1985年)

[7] 西脇常記訳注『史通内篇』(東海大学出版会、1989年)

[8] 中山裕編『御堂関白記全註釈　寛仁元年』(国書刊行会、1985年)

[9] 『文学・語学 (217)』(2016年12月号)

参考文献

辻和良 「侍語り『小一条院東宮退位事件』をめぐって―『大鏡』「批判性」の主題論的理解―」『文学・語学 (217)』 2016年12月号　1－12

中山裕編『御堂関白記全註釈　寛仁元年』 国書刊行会　1985年

保坂弘司編『大鏡全評釈』 学燈社　1985年

西脇常記訳注『史通内篇』 東海大学出版会　1989年

加納重文著『歴史物語の思想』 京都女子大学　1992年

小峯和明著『院政期文学論』 笠間書院　2006年

河北騰著『大鏡全注釈』 明治書院　2008年